

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年11月14日)

授業者：〇〇

範囲：エネルギー問題

主な感想・代案

- 教材づくりのクオリティの高さが特に印象的でした。それによって、生徒に考えさせようとしていることも伝わってきます。
- 既習事項だということですが、個人的な意見としては、1年半以上も前の地理の内容を当てにするのは現実的ではない気がします。というか、私だったら覚えていない(苦笑)。その際に、「各発電方法の特徴について」という資料を配って考えさせていましたが、ここで個人が読み取る時間か個人で理解しやすい工夫をする必要があると感じます。
- 授業全体として、同じことを何度も聞いているような印象を覚えました。そう感じた理由としては、おそらく作業1と作業2が重複しているような印象があったからだと思います。個人的には作業2に特化した授業にして、その中でエネルギー問題を考えさせる方法はあったかなと思います。(ただ、生徒に理解を促す丁寧さという意味では、作業1→作業2はありなのかもしれない。)
- 私であれば、マニフェストを選ばせる理由を書く際に、多面的多角的に捉えざる得ないような設定を作るかもしれません。例えば、大まかな理由をワークシートに書かせるとともに、「この政策で優先されていること」「この政策で軽視されていること」と書かせます。後、可能であれば、「この政策は誰が一番喜ぶか?」みたいな問いを設定しても良いかもしれない。そういった問いに答えながらマニフェストを選ぶことで、グループごとでの意見を提示した際に、どの価値が対立していたり、優先事項が真逆なのかがよく分かると思うからです。「効率性」「持続可能性」という二軸から政策を価値づけることができるかもしれない。逆に言えば、そういった工夫がないと、「多面的・多角的」になるかどうかを、生徒のポテンシャル任せにしてしまう懸念があるように感じます。
- 感覚的な話になるのですが、指導案上の導入部分の構成に大きな違和感はないにもかかわらず、模擬授業を見ると、一つ一つの発問が切れ切れになっているように感じる瞬間がありました。その理由を確定するのは難しいのですが、生徒と一緒にある問いを探究したいというムード作りが大切なのかなと思います。今回は、問いを置きに行っている感じになっていて、結果的に全体の流れが滞った印象を持ちました。例えば、卒業論文を自分自身が「なんでだろう?」とワクワクしながら探究するような、そういった雰囲気が生徒に伝わると変わってくるものもあるのかなと思います。

【コラム】理論と実践の接点

- 誰にとっても難しい問題を考える際に、複数の観点から政策を分析する手法が授業実践などでも最近提案されています。実は、大人でも「まじめに考えだしたら選べない」という社会問題は少なくないので、観点別に問題を分析する手法は意外に有効で、街づくりなどもワークショップなどにも活用されたりします。
- 例えば、長田(2014)は、「熟議」という視点に注目して、アメリカのナショナル・イシュー・フォーラムという団体が出している教材を分析しているのですが、論争問題を論じる際に「私たちにとって価値あるものは何か?」「様々なアプローチによって生じるコストや結果は何か」「私たちが向き合わねばならない緊張関係や対立は何か?」の三段階に分けて、論争問題を分析することを促しています。そのままは使えないですが、多面的多角的に考える授業づくりに生かせる点は多いと感じます。

【参考文献】長田健一(2014)「論争問題学習における授業構成原理の『熟議的転回』」